

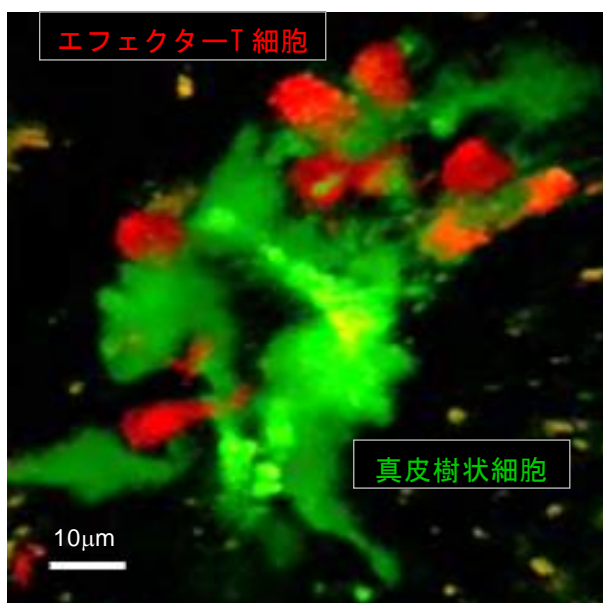
## 「かぶれの発症における血管周囲の免疫細胞の集積の重要性の解明」

### 今回の論文の意義と概略

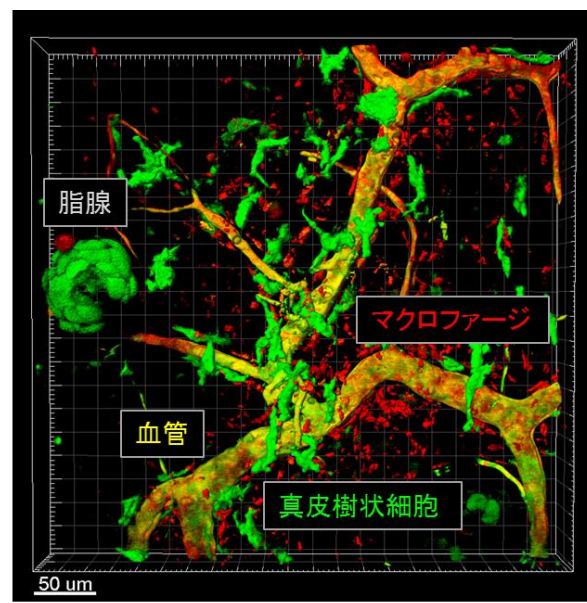
これまで、皮膚以外の末梢臓器（肺・口腔/鼻粘膜・消化管・外生殖器）にはリンパ網内系組織が発見されていましたが、皮膚では1980年にSkin Associated Lymphoid Tissue (SALT; 皮膚関連リンパ網内系組織)という概念は提唱されたものの、その実体は見つかっていませんでした。そこで我々は、接触皮膚炎反応（かぶれ）を三次元可視化することにより、皮膚におけるSALTの存在を検証しました。

その結果、二光子顕微鏡という特殊な顕微鏡を用いることで、接触皮膚炎反応において、皮膚内に形成されたSALTを撮影することに成功しました。さらに、SALTは定常状態では存在せず、免疫応答が起こっている時にのみ誘導されることを発見し、我々はこれをinducible (誘導型)SALT、すなわちiSALTと名付けました。iSALTは、マクロファージ・真皮樹状細胞・エフェクターT細胞が血管周囲に集簇することで形成され、このiSALTの形成なしに接触皮膚炎反応が起こらないことから、iSALTは少なくとも一部の皮膚炎反応の誘導に必須であることが示されました。

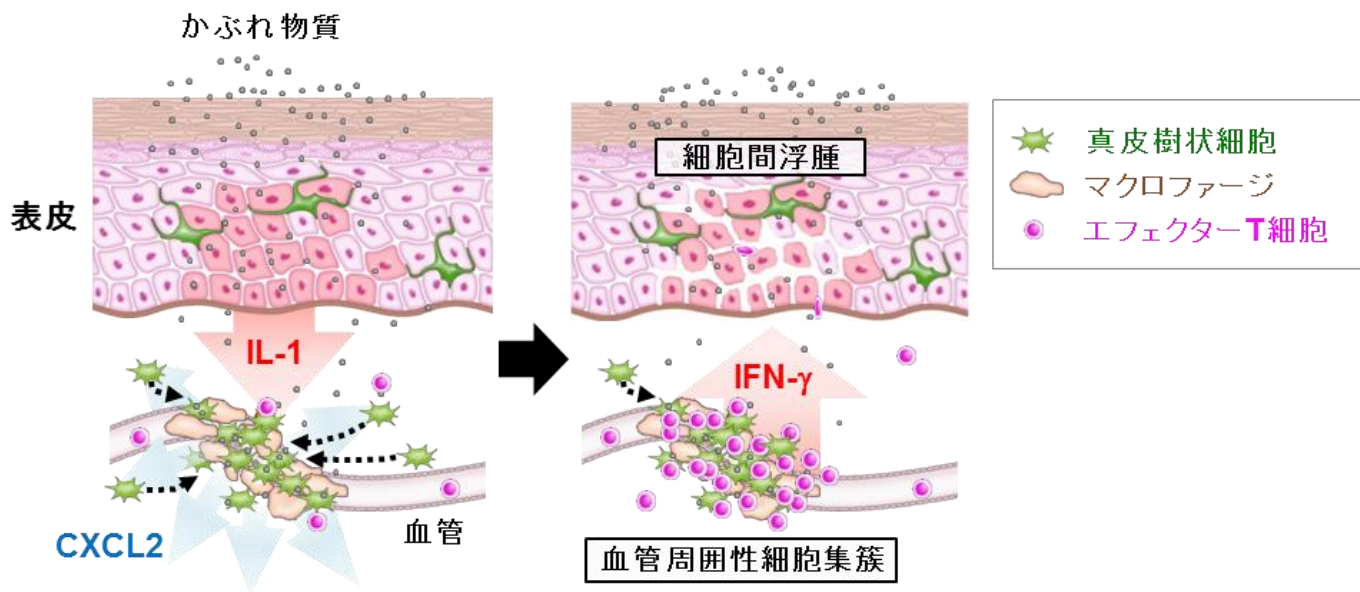
現在、かぶれ治療の主流はステロイドの外用ですが、今回の研究成果によってよりiSALTの形成を阻害する化合物が開発されれば皮膚炎を制御できる可能性があり、今後iSALTの役割の更なる解析が求められます。



真皮樹状細胞とエフェクターT細胞の集簇



血管周囲に集簇する真皮樹状細胞とマクロファージ



接触皮膚炎反応における iSALT の役割